

## 祖父 植田祐弘の思い出

孫（曜子の長男） 渡邊秀一

私が結婚するまでの約 25 年間住んだ家は、祖母（祐弘の夫）が購入した土地に建てられたもので、その棟続きに祖父母の家があった。何故すでに帰化して事業まで営んでいる祖父ではなく祖母名義なのか、今では知る由もないが当時の事情があったのかもしれない。

祖父母の家とはドア 1 枚で行き来出来、我々子供部屋の隣が彼らのリビングルームであったので自由に出入り可能な私たちにとっては同居同然であった。彼らの見る TV の音もよく聞こえてきたが、祖父は大相撲が大好きで開催時は毎日相撲放送開始（15 時？）と同時に見始めていた。TV の前の食卓上には報知新聞が広げられ、祖父は勝った力士名に赤鉛筆で印をつけていた。大相撲だけでなくプロレス中継も好きだった。多くの日本人同様、力道山やジャイアント馬場がかつての敵国アメリカのレスラーを空手チョップでなぎ倒すシーンが心地よかったのだろうか？声を上げて応援していた記憶がある。TV 観戦のお供はビールか燗をした日本酒だった。

小学生の中頃までは祖父と一緒に風呂に入った。当時は我が家と祖父母の風呂場は共有だった。祖父はよく自らが参戦した第一次大戦の話をしてくれ、私も好んで聞いた。祖父が何度も手ぶりを交えて得意気に話してくれたことは脳裏に残っているが話の中身は全部忘れてる。

隣に外国人が住んでいるということで私の小学校の友人は興味深げに我が家に遊びに来た。当時世間にはまだ外国人に対する差別意識はそれなりにあったが、外国人の家庭に育った私の母親はオープンな性格で、子供の友人を誰でも快く招き入れたのでしょっちゅう出入りがあった。大人になってその友人らに聞くと、我が家に来ると当時の日本家庭では珍しいお菓子を母親が出してくれたことを覚えており、それが人気の原因だったのかもしれない。普段食べていた私にはその菓子が何なのか定かではないが、おそらくハーシーのチョコレートやウエハース、泉屋のクッキーのようなものだった気がする。昭和 40 年（1965）前後のことである。舶来食品専門の業者が我が家に入出入りしていたのも当時は珍しく、母の育った環境がうかがわれた。

小学生が数人集まり祖父宅と共用の庭で遊び始めると当然騒がしくなる。あまりに興が乗りすぎると祖父は執務室の窓を開け「うるさい！」と怒った。私には妹が二人いるが両親が不在時彼女らは私に意地悪されると（めったにはなかったと思うが）、隣の祖父に助けを求め、私は祖父に追いかけられた。大きな祖父が私の名を呼びながら近づいてくるのは怖く、隠れ場所を探したものだ。

祖父は私が中学生の時は英語の先生、また高校時は第二外国語のドイツ語の先生でもあった。中学生時にデストロイヤーのマスクがほしくて書いた英語のレターを添削してもらった。マスクは無事アメリカから届いたし、ドイツ語の成績も大学 1 年まで A だったから便利で良い先生だったことになる。

祖父が残した文化で今も私が受け継いでいるもの、それは 12 月のシュトーレンである。毎年 12 月初め祖父は田園調布駅前にあったジャーマンベーカリー、後年は広尾に出来たフロイントリーブというドイツパン屋に出向き我が家の分も

含めシュトーレンを買ってきた。その出で立ちはというとスーツにネクタイ、ハットで手に持った木製の節出しのステッキを前後に振りながら颯爽と歩いていくのであった。きっとドイツ人の彼にとってアドベント(クリスマスまでの準備週間)は1年の中でも重要なイベントだったに違いない。

広尾のフロインドリーブは最近閉店したが、数年前に買って食べた時、子供の頃のま味の味だったので大変懐かしく感動した。このフロインドリーブはNHK朝ドラ「風見鶏」のモデルになった神戸のパン屋フロインドリーブの姉妹店だった。フロインドリーブ氏は祖父の俘虜仲間であり、その関係で祖父が使うようになったのだと思われる。